
影の女

虹乃 咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

影の女

【Nコード】

N9392P

【作者名】

虹乃 咲

【あらすじ】

大学に通うため兄と暮らそうと思い兄の住むマンションへ行ったはいいが、そこには兄と冷徹そうな人が。

兄の友達だと思ったが彼はなんと兄の恋人らしい。

そんな三人の恋物語・・・？

プロローグ（前書き）

作者にはBLがよく分からない
なので想像で書いてみました

プロローグ

『じゃあ、今から行くね』

一パタンと携帯を閉じて香月^{こうづき} 蜜華^{みつか}はキャリアバックを引きずりながら目の前にそびえ立つ建物を見上げた。

「でっかいなあ。本当にこんな所に住んでるのかな」

蜜華はこのマンションに住む兄、香月^{こうづき} 遥^{はるか}の部屋に今日から住むことになっている。

蜜華は来年から大学生になる。そのため大学に近い兄のマンションから通おうと思い、メールしたところ構わないと返事が来たため今日から暮らそうと一人で乗り込んだ。

後から宅急便で荷物が届くため、持ってきたのはキャリアバックだけだ。

兄の給料と性格から古いアパートを想像していたがこんなに真新しいマンションに住んでいるなんて思いもしなかった。

「えっと何階だっけ？201って事は二階よね」

このマンションはセキュリティも万全のようだ。強面^{こわもて}の警備員が目を見光らせている。

若干、腰が引けたが鍵を指すとガラスのドアが静かに開いた。
そのままエレベーターに乗り二階のボタンを押した。

一だがいくら探しても兄の名前がない。

おまけにこの階の部屋番号は21から始まり28で終わっている。
201って20階ってこと!?

半信半疑だったが改めてエレベーターに乗り直して20階のボタンを押す。

「20階って最上階じゃない」

本当に住んでいるのだろうか。

だが20階に着くと表札に兄の名前があった。

当たり前だがマンションやアパートは上に上がっていく程に高くなる。

「お兄ちゃん、こんなにお金あったかしら」

いや、絶対ないだろう。

いろいろな気になることはあるが帰ってきた時に聞けばいい。

兄にもらったスペアキーを使って鍵を開けた。

「汚っ!!」

目の前にはテレビで見たことしか無い部屋が広がる。
多分、蜜華には分からないが、あそこにある黒のソファや白のタイルのキッチンなど確実にブランド物だろう。
だがこれらは本来の輝きを失っている。そこら中に散らかっている服やゴミのせいだ。

「予想以上」

あの兄が家事なんて出来る訳が無いっていうことは蜜華が物心ついた時から知っていたが、さすがにこれは酷い。

キャリーバックがものすごい音をして倒れた。
開いた口が塞がらないとは、まさにこのことだ。

「仕方ない、やるか」

腕まくりをしてゴミと見つめ合った。

プロローグ（後書き）

・・・ごめんなさい

BLの本を見ると眉が寄ります
でも書きたかった☆

兄の恋人（前書き）

描写って難しい

兄の恋人

部屋に鍋の匂いが広がる。

「よし、完璧」

味を確かめ鍋の火を止めた。

「早く帰ってこないかなあ」

いつも弁当生活の兄に今日は家庭料理を食べさせようと思って掃除が終わった後にすぐ食材を買ってきた。

今日は玉ねぎとアサリがサービス品だったため、今日の料理はアサリのクリームパスタとオニオンスープだ。

それにしても、ちらりとゴミの袋を見る。

「これは無いなあ」

何週間、お弁当続きだったんだ。

お弁当の空だけでゴミの袋が3袋も出た。

「明日ゴミを近所にばれないように、こっそり出すしか無いな」

次は魚を焼きながら、明日のゴミの出し方を考えていた。

一ガチャン、突然ドアが開く音がしたと思ったら、リビングに誰かが入ってきた。

「お帰り、お兄・・・」

言葉が止まった。

入って来たのは兄では無く20代後半の男性だ。

まず目に入ったのは整っている顔立ちだ。ハーフなのか、驚いたアッシュの瞳に高い鼻。髭もなく唇は厚く少し開いている。髪は黒く肩位と長いが不潔な感じは全くしない。兄より少し大きい位か、身長は180を軽く超えている。7時だというのに全くくたびれてないぴったりとしたグレーのスーツ。

「ああ、（お兄ちゃんの）友達の方ですか？」

一瞬魅とれてしまったが相手の瞳が意地悪く光ったのを見て腕まくりをしていた袖を直しエプロンを取って身を整え笑顔を作った。

「おい、蓮。お前も持ってくれよ」

スーパ一の袋の音をさせながら遙も帰って来たようだ。

「お兄・・・」

帰って来たため紹介をしてもらおうと少し安堵しながら兄の声を聞いた方へ顔を向けたが、まるで突然極寒の地に放り投げられたように身体が固まった。

「んっ・・・おい、いきなり何っ、つつ・・・うん」

蜜華は自分の目を疑った。

蜜華の目の前で二人がディープなキスをしているのだ。

舌を絡ませて甘い声を出している。

遙が持っていたスーパーで買っただろう弁当を落とし相手の男の肩に手を置いている。

男は蜜華に目を向け、まるで遙が自分の物だと見せつけている。にやりと口元が笑っているのが見えた。

「・・・お兄ちゃん」

ほとんど無意識に呟いていたらしい。

鼻を焦げた匂いを掠める。

あ、魚が焦げてる。

頭が働かない中でふと冷静に思った。

「うわっ!! 蜜華!？」

蜜華の掠れ声を聞き止めたらしい遙が男からバツと離れた。

だが遅い。もうバツチリと二人が舌を絡めているのを目撃してしまったのだから。

それに遙の呼吸が乱れている。

「なな、何でっ!？」

「おい、魚焦げてるぞ」

こんな時でなければ耳に入ってくる低い美声は心地よいと思うのだが今はそんな状況ではなかった。

だが、魚が焦げていると聞き、ふらふらと台所の火を止めた。

「なんで蜜華がいるんだ？」

力なく遥のほうへ顔を向けた。

「メールしたじゃない。今日、来てもいいって返信したでしょ」

「そんなの知らないぞ。第一、メールなんて来てないだろ」

「ああ、俺だ」

いきなりの第三者の声に二人はそろって見上げた。

「遥の恋人かと思って勝手にメールした。まさか妹だったとは」

全く悪びれていない様子で、むしろどこか面白がっている様子で二人を見比べている。

その視線にいやな感じがしたが、遥の方へと説明を求めた。

「蓮、お前また勝手に俺のメール見たな」

「ああ、悪いと思っている」

どこが悪いと思っているのか、全く動かない表情を睨みつけた。

「あの、あなたは？私は兄、遥の妹の香月　蜜華です」

「悪い蜜華、こっちは俺の会社の社長の榊原　蓮《さかきばら　れん》だ」

何とか顔の筋肉を駆使し笑顔とよべるものを作った。こんなに顔が痛くなる笑顔は初めてだ。

遥は先ほどのキスのためか少し赤くなりながらも蜜華に説明してくれた。

だが当の本人は他人事のように聞いている。ニヒルな笑みを浮かべながら。

「その若さで社長ですか、並々ならぬ努力をされたんですね。でも何故社長が兄の自宅に？」

「分かっているだろう、俺と遥は恋人だ」

ぐいっと遥の腰を抱き寄せ先ほどの続きを蜜華の前でしようとしている。

まだ話もしていないし何の解決もしていないのに、だ。

遥はさらに赤くなって蓮を見つめている。

「とりあえず食事しながら、お話ししません？」

空気を読まず、いや、わざと甘い空気を乱して蜜華は食卓に顔を向けた。

蜜華の笑顔は先ほどから少しも動かないままだった。

兄の恋人（後書き）

そろそろ晩御飯作らんと
指が動かない・・・

兄は遠い人

話を聞くと彼は兄の上司らしい。

兄、遥は大手の外資系企業に勤めている。遥は人との交渉力に優れているため、すぐに抜擢され社長の元でさらに働き磨かれていた。

「じゃあ、二人の出会いも社内だったんですか？」

お皿に今日のメイン料理、クリームパスタを三人分用意しながら聞いた。

「まあ、そうだな」

「そうなんだ、お兄ちゃん、前付き合ってた綺麗な彼女は？」

「ああ、いや、その」

どうも歯切れが悪い。

「別れたから俺と付き合ってるんだ」

我がもの顔で兄のために作った料理を片っ端から食べていく蓮をちらりと見た。

男の人が早食いなのは知っていたけれど、こんなに早く食べる人

を見たことが無かった。これは、もしかすると遥の分もとられてしまうと考え、遥にも早く食べるよう勧めた。

「そうなんだ」

それだけ言って蜜華も食べ始めた。

「そういえば、蜜、お前何で来たんだ」

そうだった、この問題が残っていた。
勝手にメールをした張本人へと顔をやるが、本人は知らぬ顔で食べている。

「んー、メール見てないの？」

「蓮が消しちゃったっぽい」

「そうなんだ、んー、ちょっと休みだったから顔を見せに來ただけだよ」

「つてか、お前の荷物多くないか？」

キャリアバックがぱんぱんとなっているのも見て遥は目を見張る。

「女の子は準備が大変なんです」

「女っていうのは分からね」

「分からなくて結構。ごめんね、急に押しかけて」

すまらなそうに眉をしかめる妹は本当に気をつかってくれる。

遙は困ったように苦笑して蜜華の頭を撫でた。

「いや、俺がメールを受け取ってもOKしてたさ」

「ありがとう」

そういうわけで、と蓮を振り返る。

相変わらず彼は手を動かし続けている。

「明日には出て行くので、今日だけ泊まらせて下さい」

分かった、というようにフォークをひらひらさせた。

「ただし寝る場所はそのソファでな」

蓮が指差した黒いソファはとても大きく蜜華が寝ても余るくらいだ。

「ありがとうございます」

遙は眉を顰めたが蜜華は泊まらせてくれるだけで充分なのだ。

蓮も蜜華が文句を言うと思っていたので少なからず驚いた。

「あ、お風呂にお湯が入ってるので食べたら入って下さいね」

食べ終わった自分の皿と遙の皿を流し場へ運びながら蜜華は2人に言った。

「蜜^{みつ}は？」

「洗い物を片付けてから」

蜜華はすっかり空になった皿を洗い場へと持って行った。

兄は遠い人（後書き）

短かったですかね？

次は長くできるよう、自分ふあいつ！！

見ざる言わざる聞かざる

遙と蓮は食べ終わると直ぐに2人仲良く風呂に入り、2人仲良く寝室に籠もった。

蜜華はリビングで1人勉強をしていた。音量を最大にして音楽をイヤホンで聞きながら。

そうしないと寝室から漏れてくる喘ぎ声で勉強に手がかかない。何が悲しくて兄の喘ぎ声を聞かなくてはならないのか。

兄はなるべく声を抑えてくれているが蓮さんはわざとだろう。耐えている遙に対して囁いている。

その言葉を聞きたくなくて勉強に集中することにした。

30分位した後か、目の前に缶を置かれてやっと蜜華は顔を上げた。

そして目の前の人物に気付きイヤホンを取る。

「あ、蓮さん明日も仕事があるのに寝なくていいんですか？」

「ああ」

遙との事後、シャワーを浴びた上半身裸の蓮が蜜華の勉強を妨げ

た。

彼は湯上がりのため肩にタオルを回している。

まだ肌にしっとり付いた水滴を拭き取れてないため無駄に色っぽい。

「・・・兄は？」

「疲れて寝てる」

さいですか、きっと私がいるからいつもより激しくしたんでしょうね。

「明日はどうするんだ？」

「ああ」

蜜華は遥のマンションから学校に通おうと思っていたため家を出てきたのだ。

だがこんな展開になるとは思っていなかった。

確かにメールに絵文字や他人行儀な文だな、とは思ったがまさか他人が勝手にメールをしているとは思わなかった。

「いえ、大丈夫です。すみません、いきなり押し掛けてしまっ

「いや・・・」

蓮は普段情けなどかけない冷血な男だがさすがに遥の妹とあって口をどもらす。

蜜華から貰ったメールには家を出て、この家に住みたいと申し訳なさそうに書かれていた。

だがどうせ帰る家があるだろう、と高を括っていた。

蓮を見上げる蜜華から目をそらし、テーブルを見るとかなり使い込んだ本が山積みとなって重なっていた。

経済学や会計、フランス語や中国語と多種多様だった。

まだ高校生のはずだ。大学に入る前から勉強とは少なからず感心した。

「ああ、私は将来、兄の秘書になりたいんです」

こんなに多くの分野に手をつけているのを不思議に思っている蓮に将来の夢を話す。

けれどお兄ちゃんは反対する。もっと自分を活かせる職があるだろうと。俺の世話をし続けなくていいんだと。

「そういえば、お前が行く大学は有名なところだな」

「ありがとうございます。学問が未だ未熟な者ですからより良い大学で多くの知識を得たいと思ったんです」

「そうか」

蜜華はこの年代ならば彼氏でもつくってデートをして最後の高校生活を満喫しているはずだ。

全ては兄のため、か。

自分を犠牲にしてまで兄を守りたいとは、結構見どころがあるかもしれない。

蓮は初めて女、蜜華というものに興味を持った。

優しい気持ち？

黒い高級車に乗りながら歩道に車を寄せ、携帯で細やかに部下に指示をしている蓮がいた。

「・・・ああ、分かった。じゃあ後は頼む」

蓮は携帯を折り畳んでポケットに入れた。

今朝のことを思い出した。

久しぶりにまともな朝ご飯を食べと思う。いつもどちらかが買ってきたコンビニ弁当で朝ごはんを食べるため、食べた気がしなかった。

ほかほかのご飯、塩分控えめの味噌汁、焼き魚、まさに日本の食卓だった。

昨日、蜜華は深夜の3時近くまで起きていたはずだ。

それなのに7時ちょうどに支度が出来ていた。

豆豆しい女だと思った。頭もいいしそれに器量も悪くない。相手が自分じゃなかったら、今頃マンションで蜜華は遥と過ごしていただろう。

ふと蜜華に似た髪型の女が通った。

もう一度確認してみる。

キャリアバックを引きずりながら歩道を歩いている。格好は昨日

のままだ。

そのまま公園の中に入って行った。

何をしているんだ、もう少し見ていたかったが仕事があったため車を発進させた。

今日はコンビニ弁当はいらないと遥からメールがあったため、そのまま帰ると遥がテーブルの上に晩御飯の仕度をしていた。遥は蓮と同じく生活能力が全くないため掃除も洗濯も、ましてや食事の支度なんて出来ない。

それなのに美味しそうな角煮や金平ごぼうのサラダなどある。

「これは？」

「蜜が朝、支度しといてくれたんだ。冷めても美味しいけどレンジで温めるだけでいいって」

上着をそこら辺に投げる。

美味しそうな匂いに食欲が湧いた。

「そういえばお前の妹、家に戻ったのか？」

「・・・それが」

遙が顔を曇らせた。

「叔父さん達が言うにはもう出て行って荷物も無いって」

「叔父？」

「ああ、言ってなかったっけ？両親は俺達が小学校の時に交通事故にあって叔父さん家に住んでたんだ」

それじゃあ蜜華も戻りにくいだろう。

「さっきメールしたんだけどさ、友達の家にいるって返ってきたんだけど、ここら辺に友達なんていたかな」

それを聞くと蓮はご飯に手をつけずに外に飛び出した。

そんな自分に冷静に問いかける。たかがどこにでもいる女の内の一人じゃないか、どうしてそんなに必死になる必要がある。

頭の中は家に戻れと言うが身体は車まで向かって歩むのを止めない。

当てもないが、もしかしてと昼間に姿を見た公園に寄る。

車を下りて辺りを見渡した。

昼間とは違う印象を受ける。昼間は子供たちが騒いでいた場所が夜になると不気味に感じるものだ。

近くの電灯もきれいかかっていて点滅していた。

象の形をした遊具に穴が空いていて子供たちがそこを通り抜けているようだ。

まだ肌寒いこの季節、蓮はその穴を覗く。

やはり蜜華はいた。身体を丸くして寒さを和らげようと持っていた服を何重にも重ねているようだ。

影が差したのに気づいたのか蜜華は顔を上げた。

口を開けて止まった。

なかなか間拔けな顔だ。

「・・・なんで」

「こんな処にいたら風邪をひくだろう。家に来い」

蜜華の腕を引っ張って穴から引きずり出した。

蜜華は戸惑いながら荷物を引きずって車に乗った。

優しい気持ち？（後書き）

なんか、すごいお待たせしました！
楽しみにしてた方、遅くなりました。
。

ベッドイン・・・？

そのまま半ば強制に蓮に連れられマンションへと戻った。

そこには既に蜜華が作っておいた料理を蓮の分まで完食してしまっていた遙がいた。

「あ、おかえり」

「遙、お前・・・」

「悪い、蓮は帰って来ないと思ってさ」

若干というか、かなり呆れた蓮が全く悪びれてない遙の頭を小突く。それでも軽くなのだから本気では怒っていないのだろう。

「いてっ」

「俺の飯を奪った罰だ」

「あの、良かったら作りましょうか」

2人の世界に片足を突っ込んでいた蓮と遙に第3者の声が遠慮がちに入る。

蜜華だって本当は恋人同士の甘い時間を裂きたくはないのだ。しかし目の前で盛大にお腹を鳴らしている人を無碍に放っておくことも出来ない。

「おお、ミツ。あれ？お前、友達の家に泊まるんじゃないか」

「えっと・・・」

「友達が出掛けてしまったらしい。それを俺が拾った」

蜜華は顔を上げて蓮を見た。

その顔は信じられないと語っている。

「いいから飯だ」

「はい」

ぶっきらぼうな蓮に蜜華は嬉しそうに返事をして台所に立つ。

何故か完食をした遙が摘まんできたのをかわしつつ料理を作った。

夜、いつものように2人が寝室に入った後、蜜華は皿洗いや明日の支度を終え、のんびりお風呂に浸かっていた。

「気持ちいい」

張ったお湯に顔をつけて伸びをする。寒さで強張っていた筋肉が緩んでいくのがわかる。

蜜華はうつとりと目を閉じながら今日の出来事を思い出していた。まさか蓮が迎えに来てくれるとは思ってもしなかった。

昨日はあんなに冷たい表情しか見せなかったのに本当は冷たい人ではないかもしれない。わざわざ蜜華を迎えに来てくれたんだ。そう考えると自然に笑みがこぼれる。

少しは蓮に近づけたかもしれない。

髪を乾かさないうで部屋着で勉強を始める。普段はしっかりと髪を潤いを保つために乾かすのだが今日はそんな気になれない。

勉強を始めようとフランス語の辞書を手に取りながらペンを持つ。しかし今日は住み込みのバイトを探して歩き続けたため体力の限界だった。

うつらうつらしては、はっとして、辞書を眺めては首が上下に揺れていたがついにテーブルに伏せてしまった。

蜜華の朝はいつもの習慣から6時に起きる。

目を覚ますと一番最初に遥の寝顔が目に入った。

驚いて後ろを振り向くと固いものがぶつかった。
蓮の胸だ。

2人に挟まれている。しかも両方とも上半身裸だ。引きしまった筋肉が目の毒である。

こ、これはどんな状態なの。

軽くパニックになったが音をたてないように、こっそりと起きた。

どうやら3人が寝ていたベッドは蜜華が寝ていてもまだ余裕があるほどの大きさだ。

だが何で蜜華はここに寝ていたのだろう。

寝ぼけていて2人の愛の巣である寝室に入りこんでしまったのだろうか、わざわざ2人の真ん中で。

それとも遥がこっそり入れてくれたのだろうか。

2人が昨夜も愛し合っただろう、ベッドをちらりと見て頭を振り、嫌な考えを捨てた。

そのまま蜜華は腕をさすり寝室を出て朝の仕度を始めるために着替え始めた。

部屋から出て行った蜜華を確認した一対の目が再び閉じられ、身じろぎして恋人の身体にすり寄ったのを朝ごはんの仕度をはじめている蜜華は見なかった。

ベッドイン・・・？（後書き）

しまったあー！

前の投稿から1カ月も経っちゃいました・・・

待たいてくれた皆さん、もっと早くできるよう精進いたします・・・

朝と掃除機（前書き）

えっ、何このタイトル？

朝と掃除機

コーヒーを挽いた芳醇な香りが部屋に広がる。この酸味が強い香りはモカだろう。

目の前には蜜華がいてテーブルに料理を置いていて、そのエプロン姿が似合うと思ってしまった。エプロンは白いふりふりのついた物であり、家事などしないのに嫌がる遥に買ってきたのだが使われることはなく、簡素な服を着た蜜華によく似合っていた。

「おはようございます」

蜜華が蓮に気付いて手を止めて蓮を見つめる。

「ああ」

「朝ご飯は食べますか？」

「いい」

「じゃあコーヒーは飲みますか？」

「・・・ああ」

朝から薄い反応しかない蓮に気分を害さないで声を抑えて話しかける。

「少し待っていて下さいね」

どこにあったのか白いカップを持ってきて新聞と一緒に置く。

「新聞は取っておきましたよ。今日は何時にお出掛けですか」

「7時半」

「あら、お兄ちゃん起こしてきますね」

今の時刻は7時、男は15分あれば着替えられるが遙はしっかりと朝ご飯をとらないと頭が働かないのだ。

「あいつは寝起きが悪いぞ」

「知ってますよ」

遙はとにかく起きない。いつも3分前に起きて、遅刻ぎりぎりだ。3分で支度できることには、いつも感嘆しているが蓮がいくら揺す

ったり怒鳴っても起きないのには感服している。

だから蜜華が遙を起こせるなどと思っていたが何か悲鳴が聞こえた後、寝室から蜜華が出てきてその後、遙が続いて出てきた。

「どうやったんだ」

「企業秘密です」

「会社に遅刻しては困るだろう」

「・・・」

少し逡巡した後、蜜華は口を開いた。

「掃除機です」

「は？」

「お兄ちゃんは掃除機の音がすると飛び起きます」

それは遙と蜜華が幼い頃、まだいた両親によって植え付けられた恐怖だった。

掃除機の先端を取り、それが無くなったことにより吸引力が素晴らしくなった掃除機。元は四隅のゴミを取るのに使われるはずなのに使用方法を斜め上を通り過ぎ、それは2人の柔らかい四肢に吸い付いた。

「ぎゃーー！」

幼い頃の記憶は薄れている、今思うと何で掃除機なんかで人の身体を吸うなんて、変な恐怖心を植え付けやがって。

だが大人となってもトラウマとして掃除機の音を聞くと身体が強張るのだ、もちろん蜜華も。

自分の弱点を言うのははばかれたが遙が会社を遅刻してしまうのは駄目だ。

遅刻が許されるのは中学生までだ。後は全て自己責任の世界なのだ。

「ですから起こす時は掃除機で、それでも起きない時は頬を吸い取れば必ず起きます」

その言いように蓮は少し茫然としたが、ふきだした。朝から笑うなんて、いや笑うこと自体滅多にないのだが悔しそうな表情の蜜華と今にも泣きだしそうで、ぶつぶつと呟いている兄妹を見るのは楽しかった。

雨とコーヒー

2人を送り出した後、春休みのため暇な蜜華は外へ出て、大学で必要な物を最低限に抑えて買うことにする。

ついでに今日の夕食もだ。

ご飯を作るにあたって2人が食費に宛てている通帳を預かったのだが、あまりの金額に一度閉じてしまった。

これって普通に通帳だよね。ほら、食費用って書いてあるのにこんな金額なんて有り得ないでしょう。

こんなにお金を使うのは恐れおおいため、やはり出来るだけ節約しようと思った。

「あ、そう言えば昨日歩いてた時にコーヒーの専門店があったのよね」

昨日、ぶらぶらと当てもなく歩いていたら、良い香りがモダンな店から香ってきたのだ。

「あれって、こっちだったよね」

自分で味をみて、良い豆だったら買っていこう。やはり大人にはコーヒーが必要だろう。疲れている遥に美味しいコーヒーを淹れてあげないと。

買った荷物をぶら下げながら『Après la pluie』と書かれている喫茶店へと入る。

「いらっしやい。おや、初めてのお客さんだね」

口元に白い髭を生やすいかにも好好爺が髪をオールドバックに固めながら出迎えてくれた。この人がこの店のオーナーだろう。店の中には1人しかないし、カウンターの中でコップを綺麗に磨いていた。

「どうも、初めまして」

昔は好青年であっただろうお爺さんに会釈してカウンターに座る。周りに客はおらず、まったりとした外国の曲が流れている。

「あ、ロイ・エアーズだ」

「おや、知っていましたか」

「ええ、勉強に使わせていただきました」

「おや、学が深いですね」

ロイ・エアーズのこの曲は1970年代後半に出された曲であり、クールなグルーヴと心地よいアンサンブルが心を落ち着けてくれる。

どうやら趣味があったらしい。

それから2人は暗くなるまで話してしまった。

「あれ、雨？」

いつの間にか小雨が降っていたらしい。

まあ別に少し位、濡れても大丈夫だろう。そう思って喫茶店を出ようとする mascarade に止められた。

「蜜華さん、傘を持ってきなさい」

「すみません、ありがとうございます。でも雨が降るなんて、この店と合ってますね」

「おや、分かりましたか」

「ええ、この店の名前はフランス語で『雨の後』という意味ですよ
ね」

「やはり、あなたは学が深い方だ」

「ありがとうございます」

ここのコーヒーは気に入ったのでまた来るだろう。その時に返せばいい。

蜜華は人2人が入る大きな黒い傘をさして店を出た。

雨とコーヒー（後書き）

・・・虹乃はまだコーヒーの旨さが分からない未熟者です
こんなコーヒーがお薦めという方、教えてください

挑戦してみます

ただし苦すぎるのはお子様な虹乃にはまだ早いです。。

絶対王政

蜜華は最上階への部屋へと戻り、鍵を開ける。荷物を置くと、お風呂場へ直行した。

傘を借りたはいいものの、途中で男の人がびしょ濡れだったために貸してしまい、そのまま雨に濡れながら帰って来た。

傘は買って返せばいいだろう。そう思いながら濡れた服を洗濯機に入れ、温かいシャワーを出して浴びる。

「生き返る」

ご飯の材料も買い終わり、蜜華は部屋の掃除も終え、夕食を作っていると遥からメールが届いた。

『今日は残業。悪いけど飯、とっというて』

『了解。仕事、頑張って』

普通は、夕飯はいらないと返事をするところだが、そこは遙。会社で夕飯を摂るというのに家に帰ってからもご飯を食べるとはよく太らないものだ、そんな身体が羨ましい。こちらは太りすぎたり、痩せすぎたりしないように気をつけているというのに。

では、夕飯はまだいいかと火を止めて勉強をする。蜜華は時間がありさえすれば、テレビを見ることもなく勉強をする。

観るテレビをいってもニュースなどばかりでドラマやアニメなどは一切見ない。そのため芸能人にも疎く、友達と話がかみ合わないことがあったりした。

だがテレビを観るならば勉強に時間を充てる方が有意義だと思っているため、わざわざテレビを観るということはない。

蜜華はクラシックを聞きながら勉強をすると捗る。そのため携帯にいられておいたクラシック曲をかけながら教科書を開いていた。

10曲位聞き終わった頃だろうか、がちやりと玄関の扉の鍵が開く音がした。

もしや残業が早く終わったのだろうか、蜜華は玄関へと兄を迎えにへと行ったが玄関で右肩を濡らして立っている蓮がいた。

「あ、お帰りなさい」

「・・・」

そうだ、遙以外にもここで住んでいる人はいたんだ。むしろ、この人の方がこの部屋の主ではないだろうか。
完全に失念していた。

「お風呂入りますか？それともご飯にしますか？」

「・・・」

何も語らない蓮の上着を受け取りながら、きょとんと蜜華はする。
この人は最初から苦手だ、何も話してくれないし自分の唯一の兄を取ってしまうし、たまに優しいと思ったら、そんなのは気のせいだというように冷たくなる。

「寝る、入ってくるな」

それだけ言うと蓮は寝室へと消えた。

「・・・唯我独尊我儘王」

そんな言葉がぴったりだ。

まあ確かに助けてもらった恩はある。ここに置いてくれていることにも感謝はしている。

しかしあの態度は大人としてどうなのだろうか、兄の上司で無かったら文句が言いたいところだが如何せん、あの人はお偉いさんなのだ。

もし私が機嫌を損ねてしまえば兄に火の粉がかかるかもしれない。それだけは避けなければならない。

「はあ、疲れる」

初めて、いや、出会った時からだが今やっと確信した。あの人は馬が合わない。

蜜華は物音一つしない扉へと目を向けて、溜息を出した。

兄と爆弾

ご飯の支度をして家事をする。それを毎日繰り返す。一週間も同じことをしていると慣れてきた。

だが突然、朝ご飯の最中に遙が爆弾を落とす。

「あ、俺、明日から出張で北海道に行ってくる」

「・・・はあ？聞いてないわよ、お兄ちゃん!？」

たっぷり間が空いた後、蜜華が叫んだ。

普段、近くに他人がいるときは「兄さん」と呼ぶのだが、遙の開口一番の「出張」にかなり自分を忘れてしまっていたようだ。

「出張!？聞いてないよ」

「え？今言ったじゃん」

こ、この脳天気な兄め。

分かっていたが更に脱力する。

溜め息をつくとも目の前に空の茶碗が置かれる。

朝から疲れ切った顔で見上げると蓮が野菜を咀嚼しているところだった。

上司なのだから当たり前だが絶対に知っていた蓮が教えてくれなかったことにじと目で見て茶碗にご飯大もりにして置く。

本人は素知らぬ顔でまたご飯を口の中に入れていた。

「いい？会社から帰ってきたら早く支度するのよ。荷物を出しておいて。私がたたんで入れておくから」

額に手を当て、あれこれ頭の中で必要な物を並べる。そういえば、歯磨き粉とか無くなりそうだったな。

「いつも言ってるじゃない。早めに言ってるって」

「大丈夫、大丈夫。自分で支度・・・」

「出来ないから言ってるのよ」

確かに荷物を用意して詰め込むだけなら誰でも、猿でもできる。問題はそれを効率よく、隙間なく入れるのだ。遥のことだ、高いスーツはぐちゃぐちゃの皺だらけになるのだろう。帰りならまだしも行きからそれでは困る。

もしお偉いさんと雑談をするって時によれよれのスーツは印象が悪すぎる。

「・・・今日は早く帰ってきて早く寝るの。分かった？分かったら返事」

「はい」

まるで母と子のような会話にくつくつと笑い声が聞こえた。
寝起きのために少し掠れている声で蓮が話す。それさへ艶やかに感じて理不尽を感じる。自分は努力しているのに何もしないでこんな美貌を得ているなんて。

「まるで口うるさい親だな」

「ええ、世話がかかる子なんです」

苦笑して肩をすくめた。

「じゃあ今日は早く帰ってくるか」

「くれぐれも途中で酒屋に行かないこと」

「へいへい」

全く、と思いながら2人を見送る。

皿を洗いながら気づく。

「・・・私、どうしよう」

このマンションの名義は蓮だ。確かに2人で家賃を払っているだろう。しかし蜜華は居候、よくいえば住み込み家政婦だ。

しかも蓮との2人きりになってしまう。

明らかに邪魔者だ、蓮は遥がいるから蜜華を住まわせているものの、その遥がいなくなったら追い出されるだろう。

彼は男の人が好きであって、私は女だ。つまり範疇にない、というのは分かっている。残念ながら何も提供できないのだ。

やはり追い出されるのだろうか、でも今からバイトを探すとなると。

しかし先ずは遥のために必要な物をそろえなければ。

「どうしよう、私」

兄と爆弾（後書き）

ごめんなさいい
遅くなつてまして・・・

変わらぬ生活

今日のご飯はクリームパスタとサラダ、あと残り物で作ったスープだ。それを用意してテーブルの上に置く。

変わらない蜜華の毎日。

変わったといえば用意する皿が減ったことだけ。おかしなことに遥がいた時と同じ量を作っているのに2人で消費してしまう。

もっと量を増やした方がいいかと蜜華は無表情で食べている目の前の人物を見る。

「・・・」

会話は無い。しかし無理に話さなくてもいいという関係は嫌いではない。

ただテレビから聞こえる声が部屋に広がるだけだ。

「そういえば、会社は大丈夫ですか？」

そう尋ねるも答えは返ってこない。蜜華は充分承知していたので答えを着たいせずに話を続ける。

「取引先の子会社、潰れますよね」

蓮は何も言ってなかったが何故知っているかと胸中では語っている。

その答えに答えるように蜜華は続ける。

「だって、そろそろ経営が悪化してましたよね。何とか経費をごまかしてきてたみたいですけど、あの子会社が誇っていた傘下の会社、他社に売ってしまったでしょう。蓮さんの会社は、結構有名なあの会社を手放しても大丈夫なんですか？」

もちろん経営のことは手綱を握っている、うちの会社しか知らない。つい最近、世間に広まったのが有名と言っても消費者には余り知られていない会社が一つ他社の傘下に入ったというだけ。

これはなかなか、賢い。いや、一介の社員より使える。
これがうちの経営に回ったら随分と楽になりそうだ。

「お前は会社に興味は無いのか」

半ば断定するように蓮は問う。

「兄が働いている会社には興味があると言えます。もちろん、そこと提携を結んでいる会社も、これから兄の会社に影響を与えるという会社にも」

「会社には従わない、と」

「従えと言うなら」

誰が、と言わなくとも蓮はその答えをもう知っている。

———全ては兄のため。

蜜華の言動はそこから来ている。

何故そこまで兄に執着するのか。たかが言っては悪いが、家族の一人というだけだ。それなのに自分の将来をかけてまで守るもの

なのか。

蓮には兄弟がいない、だから気持ちが分からないと言っても蜜華の行動は理解できないものだった。

確か遥が言っていたなと思います。

2人の両親は亡くなったが叔父に預けられたと。それならば叔父に対して礼を果たすべきだと思うが違うのだろうか。

まあ、蜜華のことなど関係はない。ただ遥の妹だけだということ。それ以上でもそれ以外でもない。

時折見せる、唇の上にペンを置きながら考える癖。それは遥と同じ仕草ではっとするが蓮は女に感情など湧かない。

ただ、それをみて遥を思いだすだけだ。

ただ、それだけ。

蓮はそう思って、それ以上に浮かぶ想いを隠そうと蜜華から目を逸らした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9392p/>

影の女

2011年8月25日22時27分発行